

半^{はん}夜^や

良^{りょう}

寛^{かん}

首^{こぶ}を^を回^{めぐ}ら^らせ^せば^ば 五^ご十^{じゅう}有^{ゆう}余^よ年^{ねん} 人^{じん}間^{かん}の^の是^ぜ非^ひは^は一^{いち}夢^むの^の中^{うち}

山^{さん}房^{ぼう}五^ご月^{げつ}黄^{こう}梅^{ばい}の^の雨^{あめ} 半^{はん}夜^や蕭^{しょう}蕭^{しょう}と^として^{して}虚^{きょ}窓^{そう}に^に灑^{そそ}ぐ

【作者】良寛(一七五八〜一八三二年)江戸時代後期の僧侶。本姓山本、幼名栄蔵(えいざう)、のち文孝(ふみたか)と改めた。字は曲(まがり)、出家して良寛また大愚(たいぐ)と号した。越後(新潟県)出雲崎の人、家は代々神職と名主(なぬし)を兼ね父泰雄は以南(いなん)と号して

越後俳壇(はいだん)の雄であった。良寛はその長子。成長して備中(岡山県)玉島の国仙和尚(こくせんおしょう)に学び、のち諸国を行脚して

帰国し国上山(くがみやま)の五合庵に入り、四十七才から十三年間ここに住んだ。晩年麓の乙子(おとこ)神社の庵に移り天保二年一月貞心尼(ていしんに)に看取られ没す。時に七十四歳。良寛は俳句、短歌に一家をなし書もまた当代第一と称せられた。

【語釈】*半 夜…よなか。夜の半ば。 *山 房…山の庵、五合庵(ごごうあん)をさす。 *黄梅雨…梅の実が黄色に熟すころの雨。つゆ。

*蕭 蕭…ものさびしいこと。雨や木の葉が降りそそぎ舞い落ちるさま。 *虚 窓…誰もいない部屋。または人のいない部屋の窓。

【通釈】過ぎ去った五十余年の生涯を顧みると、人間社会のことは是も非も善も悪も、すべて夢の中のことのように感じられる。

この山の庵に独り坐っていると、五月雨(さみだれ)が真夜中の窓にさびしく降り注ぐのであった。

【備考】この詩は作者良寛の天衣無縫(てんいむほう)の性格の如く全く破格の詩である。平仄(ひょうそく)も韻も度外視されているが人間良寛の

悟り切った心情がにじみ出ている。